

親密な異性関係へのコミットメント規定因の研究

神菌紀幸*・黒川正流**

*広島大学生物圏科学研究科

**広島大学総合科学部

Commitment Processes in Close Relationships

Yoshiyuki KAMIZONO* and Masaru KUROKAWA**

**Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University,
Higashi-Hiroshima 739, Japan*

***Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University,
Higashi-Hiroshima 739, Japan*

Abstract : The purpose of this study was to identify a variety of factors that affect satisfaction and commitment on close relationship. We attempted to explain the process by which close relationships develop and deteriorate over time, by testing the adequacy of the investment model using longitudinal self-reported data from college students.

The result indicated that changes over time in commitment were more strongly predictive of stay/leave behaviors than were other investment model factors. Thus, stay/leave behaviors were mediated by changes over time in commitment.

Contrary to the investment model, variations in rewards contributed significantly to the prediction of satisfaction, but costs did not. And sex differences in the variables contributed to commitment was found; whereas men increased commitment because of increases in satisfaction, women promoted because of increases in satisfaction and investment size.

These findings suggested that it is necessary to revise the investment model. From this point of view, we discussed the generalizability and limitation of investment model and sex differences in the process of stay/leave behaviors.

Keywords : commitment process, close relationship, investment model, panel survey

問 題

恋愛関係にある当事者の関係に対する満足度規定要因は何か。二人がその関係を保ち続ける理由は何なのか。なぜ崩壊する関係もあれば、継続する関係もあるのか。

対人魅力に関する従来の諸研究は、他者に対する好意的態度の規定要因を明らかにしてきている。例えば態度の類似性 (Borne & Nelson, 1965) や相手の身体的魅力 (Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman, 1966) といった要因が相手に対する初期好意に影響を及ぼすことが示されている。しかしこれらの知見は、相手との関係初期の魅力を解明しようとする研究によるものがほとんどあり、関係の発展、進展過程についての十分な説明ではない。

この親密な異性関係、恋愛関係の進展や崩壊の過程を説明する有力な理論の一つが社会的交換理論であろう (e. g. Clark & Mills, 1979; Michaels et al., 1984; 井上, 1985)。一般に社会的交換理論といわれる諸理論は単一の理論体系ではないが、それらに共通する特徴として社会的行動を交換と見なし、交換の過程を記述するのに際して報酬 (reward)、費用 (cost)、投入 (input) といった経済学的概念を用いた説明を試みている。人は一般にそのような報酬を最大に、コストを最小にするように、つまり報酬とコストの差分である成果 (outcome) を最大にするように動機づけられている。そのような社会的交換理論の中でもとりわけ近年の研究に大きな影響を与えているのが衡平理論 (Walster, Walster, & Berscheid, 1973; 1976) 及び投資モデル (Rusbult, 1980; 1983) である。

衡平理論 (equity theory): Walster ら (1973) は恋愛関係において関係の衡平さが重要であることを指摘した。自分の成果及び投入と相手の成果及び投入の比較において自分の方が損であっても、得であっても不満足を感じ、自分と相手と同じである場合に最も幸福感や満足感を持ち、そしてさらに関係が衡平であると認知される関係ほど安定し、継続する傾向があるとされる。

投資モデル (investment model): 投資モデルは、相互依存性理論 (Kelley & Thibaut, 1978) に基づき、Rusbult (1980, 1983) によって提唱された恋愛関係における満足度とコミットメントを予測、説明するモデル (e. g., Rusbult, 1980; Rusbult, 1983; Rusbult, Johnson, & Morrow, 1986; 中村, 1990; 1991; Rusbult, & Buunk, 1993) である。このモデルでは関係に対する人のポジティブな感情を「満足度 (satisfaction)」、関係の安定性や関係継続の期待・意図を「コミットメント (commitment)」として両者を区別して考え、この「コミットメント」のレベルが関係継続/崩壊を媒介すると考えている。投資モデルの想定する概念の関係式を図. 1 に示す。

$$SAT = (REW - CST) - CL \quad \dots \text{式(1)}$$

$$COM = SAT + INV - CL_{alt} \quad \dots \text{式(2)}$$

$$COM = (REW - CST) + INV - CL_{alt} \quad \dots \text{式(3)}$$

$$COM = ST / LV \quad \dots \text{式(4)}$$

図. 1 投資モデルの概念説明式

投資モデルでは、個々人は高い報酬 (REW) と低いコスト (CST) を得るほどその関係に満足し、そしてそれが一般にいう期待または比較水準 (comparison level; CL) を超えれば、さらに満足度 (SAT) が上昇する (…式(1))、とされる。比較水準とは、個々人が自分が獲得した成果をその関係から受けてしかるべきだと信じている成果水準と比較する基点のことである。関係から得られる満足度が高ければ高いほど、関係へのコミットメントも高くなるであろう。しかし投資モデルではさらにコミットメントを規定する2つの変数の存在を示している。それが投資量及び選択比較水準、つまり代替関係の質である。関係へのコミットメント (commitment; COM) は、満足度とその関係に対する投資 (investment; INV) の和から選択比較水準 (comparison level for alternatives; CL_{alt}) を差し引いたものに等しくなる (…式(2))。もし比較水準の複雑さを無視するなら、式(3)のよう

にもかきかえられる。

選択比較水準とは、現在の関係以外の考えられうる代替的關係から期待される成果の大きさと、現在の関係から離脱して代替關係に移行するときに生じる費用の高さを含む概念である。投資量とは、關係に投資された資源の総量を指し、これまで關係にそそぎ込まれた時間や情緒の努力、自己開示、關係と結び付きの強い共通の友人や共有された思い出や所有物などがこれにあたる。報酬及びコストと投資の概念的差異について Rusbult (1983) は、一度投資がなされるとたやすくその關係からそれを取り去ることができない点にある、としている。つまり、報酬やコストは特定の關係にそれほど強く結び付いていず、關係の解消に伴う価値の減少、損失はそれほど劇的ではないのに対して、投資に関してはそれらが非常に大きいことを意味している。投資は關係解消のコストを増加させ、關係へのコミットメントを高めることになる。そして多かれ少なかれ關係を解消することで投資してきた資源が無駄になってしまう。投資は、Rusbult (1983) のいう「關係に対してお互いに鍵をかける」のである。

また關係の継続／崩壊 (stay/leave; ST/LV) 行動は個々人の心理的、認知的レベルの「コミットメント」によって直接的に媒介される〈…式(4)〉。なぜなら満足感と關係関与度は互いの間に必ずしも強い關係を必要としないので、高い關係関与度は代替關係への低い認知と大量の投資を生むが、その關係に不満足なこともありえるからである。あるいはまた魅力的な代替關係入手可能性は現在の關係に対する低投資と結びつき、相対的に満足な關係からも離脱していくかもしれない。

中村 (1990) は、大学生の友人關係の進展を社会的交換理論の観点から分析している。關係へのコミットメントを規定する社会的交換要因として、自他の投入 (投資)、成果、選択比較水準を取り上げ、それらの組み合わせによって導かれる諸モデル (最大自・最大他・衡平・投資モデル) の予測可能性について縦断的に検討した。その結果、友人關係へのコミットメントに対して最も高い予測力を持つのは投資モデルであった。投資モデルは調査時期、性別、關係の親密さの程度を通してコミットメントに対する高い予測力を持つと結論している。さらに中村 (1991) は、大学生の異性關係に対する満足度、及びコミットメントを規定する社会的交換要因の比較検討を行い、投資モデルに関する諸変数がコミットメントに対して強い影響力を持っていることを明らかにした。中村の研究から關係へのコミットメントの説明・予測における投資モデルの優位性が示されたといえるが、以下に示すいくつかの問題点も存在しているようである。

まず時系列的な検討が行われておらず、簡略化された各要因測定項目の妥当性の吟味も不十分に見える。さらに測定した「コミットメント」を基準変数として様々な検討を行っているが、その「コミットメント」のレベルがどの程度実際の關係の継続／崩壊の媒介しているかについては全く検討されていない。また中村の分析では、關係へのコミットメントに対する投資モデルの説明力に明確な性差は見いだされていない。しかし従来の恋愛研究の多くは、恋愛行動様態の多様な側面に性差の存在を示唆している。例えば、大坊 (1990) は、別れという過去については男性は自立しがたく、過去のイメージにとらわれているのに対して、女性は過去から現実への切り替えが早く、今の關係に積極的である、と報告している。松井 (1990) は、恋愛の初期には男性は女性に対して急激にコミットメントを高めていくのに対して、女性は關係の初期にはコミットメントを低めておいて、「キス」が終わった後に関与を高める、としている。このような点から、先の問題点を克服した上で、關係へのコミットメント規定因の同定及びその性差をなお吟味する必要があると思われる。

本研究の目的

関係のコミットメントの説明・予測における投資モデルの優位性を示した中村（1991）の研究をふまえ、青年の恋愛関係への満足度、関与度を規定する要因の同定を投資モデルの妥当性の吟味を通じておこない、その発展、悪化のプロセスについての説明を与えることが本研究の目的である。

1. [関係関与度]の妥当性の検討：[関係関与度]は、関係継続／崩壊の基準変数として妥当なのか。[関係関与度]のレベルは、関係継続／崩壊を媒介しているのか。

2. 投資モデル及びその構成要因の時系列的吟味：恋愛関係の進展を予測・説明する投資モデルの妥当性を吟味する。さらに投資モデルは関係の進展度を通して予測力を持つか否かを吟味する。関係の進展は単純な時間の関数であるとは考えにくい。そこで今回はその一つの指標として、恋愛行動段階尺度（松井，1990）による行動段階を援用する。恋愛行動段階尺度とは、恋愛の進展度を具体的行動面から判断するために作成された尺度で、当該項目を相手との交際で経験したか否かを2件法で回答させる。ここでは恋愛行動は5段階に分けて設定されており、各段階は直線的な位置関係を想定されている。この尺度を用い、行動レベルで関係の進展度を区分し、各段階別に投資モデルの吟味を行う。

3. 性差についての検討：投資モデルの妥当性を確認した先行研究（e. g., Rusbult, 1980；1983；中村，1990；1991）では報告されていない、関係へのコミットメントを規定する要因の性差について探索的に検討する。

方 法

〈被験者〉 国立大学の学生258名（男性：130名 女性：128名） 広島市に大学キャンパスはあり、学生の大半は下宿生である。〈調査方法〉 同一質問紙を用いたパネル調査を集合一斉法により行った。調査実施間隔は、約1カ月で、計3回行われた。調査実施に際して回答の秘密は厳守されることを繰り返し強調した。

〈質問紙構成〉 最も親しい異性を一人想起してもらい、その人物との関係について以下の質問に回答を求めた。(1)関係相手のラベルリング：その相手との関係にラベルづけをするならどのようになるかを1：恋人、2：ボーイ／ガールフレンド、3：婚約者、4：片思い、5：親友、6：友達、7：その他、8：当てはまる人はいない、の中から選択する形で回答させた。(2)相手の年齢 (3)相手との交際期間 (4)恋愛行動段階尺度（2件法 18項目）(5)投資モデル要因測定項目：Rusbult (1980)の質問項目の日本語訳を用いた（付録参照）。

結 果

3回の調査全てに回答し、3回分とも同一人の回答であることを同定可能な者175名分を有効票とし、分析対象とした。またパートナーに対するラベルを「恋人」、「ボーイ／ガールフレンド」、「婚約者」とした者を親密な異性関係・恋愛関係にある者（親密群）と判断した。同一ラベルであってもその相手が異なっている可能性については、パートナーとしてあげられた相手の年齢、交際期間で可能な限りチェックし、同一人物であることが断定できないものは、分析から除外した。

■調査対象者の属性及び交際の様態

分析対象者は175名（男：78名 女：97名）、平均年齢20.2才（SD=.89）。男女共にその約半数が親密群に属し、約30%が「恋人」のラベルづけを行っていた。親密群男性の平均交際期間は11.9カ月（SD=12.22）、女性は15.1カ月（SD=16.60）。男性は自分より年下か同年令と、女性は年上か同年令と交際している傾向が顕著であった。このような今回の被験者の交際様態は、先行研究で用いられた調査対象者の属性と大きな違いはない。

■質問項目の均質性及び信頼性の吟味

第1回調査分の投資モデル要因測定項目について、各モデル要因ごとに上位一下位分析を行い、項目を取捨し、第2回目以降の調査に採用した。また各モデル要因測定項目の信頼性を検討するために、第1回調査分のデータについて各モデル要因ごとに α 係数を算出した。その結果、報酬項目 .71、コスト項目 .76、代替関係項目 .70、投資量項目 .76、満足感 .76、関係関与度 .84となり、概ね満足できる値が得られ、尺度の内的一貫性が確認された。よって各投資モデル要因は、各下位項目の平均値をその測度とした。

1. 投資モデル要因による関係継続／崩壊の予測

□関係継続／崩壊の同定

関係継続／崩壊の別については、パートナーに対するラベルが前後2回の調査とも「恋人・ボーイ／ガールフレンド・婚約者」のいずれかであり、その相手が同一人物であると同定できる者を継続群とし、前回調査では親密ラベルであったのに後の調査回では非親密ラベルをつけた者を崩壊群とした。

1-(1)「関係関与度」の高低群別にみた関係継続／崩壊者数の比較

質問紙によって測定された関係関与度のレベルは、関係の継続／崩壊をどの程度反映しているのか検討する。前回調査分の関与度のレベルで被験者を中央値折半し、各群別に今回の関係継続／崩壊者数を比較した（表1-1）。その結果、調査1-2期間において関係関与度高群では崩壊者数が40名中3人（7.5%）であったのに対して、低群では40名中9名（22.5%）であった。調査2-3期間においても同様の傾向が示され、高群では41名中崩壊者3名（7.3%）、低群においては41名中11名（26.8%）であった。各調査回ごとに χ^2 検定（Yate'sの修正）を行った結果、人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(1)=2.45, p<.05; \chi^2(1)=4.22, p<.01$ ）。つまり「関係関与度」の低群における1カ月後の関係崩壊者数は高群におけるそれよりも高くなっており、関与度が関係継続／崩壊を仲介していることが示唆された。

表1-1 関係関与性の高低による関係継続／崩壊者数

		第1回目-2回目調査間		第2回目-3回目調査間	
		継続	崩壊	継続	崩壊
関係関与性	高	37	3 (7.5)	38	3 (7.3)
	低	31	9 (22.5)	30	11 (26.8)
合計		68	12	68	14

(%)

1 - (2) 「関係関与度」と継続/崩壊行動の関連

「関係関与度」が関係継続/崩壊を仲介するかどうかの決定に際して、関係の継続/崩壊は連続変量ではなく、むしろ質的な資料であるため、パス解析を用いるのは不適當である。そこで関係継続/崩壊を外的基準にとり、「満足感」「投資量」「代替関係の質」「関与度」の各要因を説明変数にして、STEPWISE法による判別分析を行った。その結果、関係の継続/崩壊は、関係の「関与度」によってのみ有意に説明されていた ($p < .005$)。このことから関係の継続/崩壊行動は関係関与度の変化により仲介されている可能性が示唆された。

2. 関係関与度を規定する要因の検討

□モデル構成要因間の相関について：説明変数が共線関係、つまり強い多重共線性を有する場合、厳密な意味での重回帰分析は行えない。そこで Chatterjee & Price (1977) の主張に従い、モデル要因間の共線関係の有無について検討した。彼らは独立変数の相関行列の固有根を算出し、それぞれが0.01より小さいか、もしくは固有根の逆数の和が説明変数の数の5倍以上であれば、変数は共線関係にあり、もしそのようなことがなければ、その変数間に問題にすべき共線性はない、と考えてよいとしている。そこで各要因の相関行列の固有根を算出したところ、男性では[報酬] 2.08、[コスト] 1.12、[投資量] 0.53、[代替関係] 0.26で、女性ではそれぞれ2.32、0.90、0.47、0.30となった。いずれも基準を満たし、その逆数の和も基準をクリアする値を得た。よって各要因間に問題とすべき多重共線性はないと判断した。

2-(1)-1 各調査回ごとの検討

関係の満足度について報酬及びコストを説明変数にした重回帰分析を行った。その結果、男女共にいずれの調査回でも報酬要因のみが有意に寄与していた(表2-1)。

続いて関係関与度について関係の満足度、投資量、代替関係の質要因を説明変数にした重回帰分析を行った。その結果、調査1、2回目では、男性は関係の満足度が大きく寄与していたのに対して、女性では満足度及び投資量が有意に寄与していた(表2-2)。

また調査3回目になると男性では投資量が、女性では代替関係の質が有意に寄与してきている。これを単純な関係継続期間の増加の効果とは必ずしも解釈出来ない。この点からも以下の恋愛行動の進展を加味した検討を行う必要がある。

表2-1 男女別にみた満足感の規定因

SAT=REW-COST					
満足感 [β]		N	報酬	コスト	R ²
男性	調査1	35	.490**		.446***
	調査2	37	.841***		.663***
	調査3	41	.573***		.551***
女性	調査1	47	.727***		.522***
	調査2	48	.642***		.505***
	調査3	44	.804***		.685***

*** $p < .001$ ** $p < .01$

表2-2 男女別にみた関係関与度の規定因

COM=SAT+INV-Clalt

関与度 [β]		N	満足感	投資量	代替関係	R ²
男性	調査1	35	.706***			.698***
	調査2	37	.732***			.528***
	調査3	41	.461**	.364*		.711***
女性	調査1	47	.296*	.526***		.547***
	調査2	48	.385**	.475**		.549***
	調査3	44		.419**	-.360**	.495***

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

2-(1)-2 1カ月後の満足度、関与度の予測

ここでさらに1カ月後の関係の満足度、関与度を予測する意味で、第1回目調査分の各モデル要因を説明変数に、第2回目調査分の「満足度」、「関与度」を目的変数にした重回帰分析を行った(表2-3)。1カ月後の満足度については男女共に報酬要因が有意に寄与していた。関係関与度については、女性は一貫して投資量要因によるところが大きく、男性では関係関与度が満足度により媒介されていることが示唆された。また調査2-3回目期間、1-3回目期間でもほぼ同様の傾向が示された。

表2-3 1カ月後の満足度・関与度の予測

目的変数	MODEL	R ²
男性 N=35		
SAT from	REW** COST	.287**
COM from	REW** COST INV -Clalt*	.494***
COM from	SAT* INV -Clalt*	.351**
COM from	(REW-COST)** INV -Clalt*	.422***
女性 N=47		
SAT from	REW*** COST	.359***
COM from	REW COST INV** Clalt	.312***
COM from	SAT INV* Clalt	.353***
COM from	(REW-COST) INV*** Clalt	.329***

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

2-(2) 恋愛行動段階別の検討

関係の進展度を示す一つの指標として恋愛行動の段階尺度を用い、行動レベルで関係の進展度を区分し、各進展度別に投資モデルの吟味を行った。行動段階尺度では恋愛行動が1次元的な5段階に区分される。各段階で経験される行動の例及び各段階の被験者数を表2-4に併せて示す。

各恋愛段階での関係関与度を規定する要因の異同、及び投資モデルの説明力を吟味するために以下の検討を行った。将来的な関係への関与度を予測・説明する意味で第3回目の関与度を目的変数に、各投資モデル要因の調査1回目-3回目期間での変化量を説明変数にした重回帰分析を恋愛段階ごとに行った(表2-5)。恋愛行動段階1から段階3までは相対的にその人数が少なかったためあわせて集計した。

男性は恋愛段階が進行しないと寄与率は高くない傾向にあり、段階5ではじめて満足度と代替関係の質要因が有意に寄与していた。これに対して女性では段階が進むと寄与率が低下していく

表2-4 各恋愛段階に含まれる行動の例と人数

恋愛段階	経験される行動	男性	女性
[1]	相談ごとをする 子供の頃の話をする 人にみせない面を見せる	0	0
[2]	用もないのに電話する 一緒に買い物に行く	2	1
[3]	相手の部屋に行く キス/抱き合う	8	6
[4]	恋人として周囲に紹介する 恋人として親に紹介する	20	25
[5]	性交 相手を殴った/殴られた	11	12

(松井, 1990による)

表2-5 恋愛段階ごとの適合度

行動段階	目的変数	MODEL			R ²	
男性	N=					
1-3	10	COM from	SAT	INV	CLalt	.498
4	20	COM from	SAT	INV	CLalt	
5	11	COM from	SAT*	INV	-CLalt**	.833**
女性	N=					
1-3	7	COM from	SAT*	-INV*	-CLalt**	.987***
4	25	COM from	SAT	INV*	CLalt	.523***
5	12	COM from	SAT	INV	CLalt	.078

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

傾向がみられた。また投資量要因は段階3までは関与度に対して負に寄与しているが、段階4になると一転してポジティブな影響を持つことが示された。さらに代替関係の質要因は関係の初期段階においてのみ有意に寄与し、それ以降は有意に負荷していない。

考 察

1. 「関係関与度」について

【関係関与度】のレベルと1カ月後の関係継続/崩壊の関係を吟味したところ、【関係関与度】のレベルは実際の関係継続/崩壊行動を仲介、反映していることが示された。

恋愛関係の継続/崩壊過程に関与する要因はまさに人それぞれであろう。それらの要因の総量、

絶対量は各関係でおそらくは異なるであろうし、またそれらは複雑に絡み合い、ある部分は共變的性質をもっているであろう。それらの要因を直接、関係の継続／崩壊行動に回帰させることは技術的にも困難であり、現象の正確な理解・把握ができにくい。そこで‘commitment’つまり関係の関与度という概念を設定し、その変化量でこれを媒介させ、考察していけば現象把握上非常に利便であるといえる。本研究における「関係関与度」は、このような位置づけを与えられている。

2. 投資モデルの妥当性

○関係の満足度について 関係の満足度に関してみると、男女共に報酬要因のみが有意に寄与し、コスト要因の影響は相対的に少ない。これは Rusbult (1983) の結果にもみられ、恋愛における「のぼせあがり」の状態として考察している。つまりいわゆる「結晶作用」により実際のコストがコストとして作用せず、「あばたまえくぼ」的に機能しているのではないかと考えている。特に本研究のような被験者の主観に基づく質問紙評定ではそのような傾向が存在するであろう。

また Rusbult (1983) は恋愛関係におけるコストを「関係や相手の負の側面」と定義しているのに対して、奥田 (1994) は「関係継続のための努力のようなもの」としている。恋愛関係におけるコストに対するこの2つの考えには実質的に重なる部分があるにしても、いずれが妥当であるかの根拠は今のところ手元にない。いずれにしても、その「のぼせあがり」状態ゆえ、ネガティブ方向の「コスト」項目の現実とのズレは、満足度に対する不寄与という形で、より顕在化したと考察できるであろう。

○関係への関与度を規定する要因の性差について 関係の継続／崩壊過程を規定する要因の性差が示唆された。また関係の進展度ごとのモデルの適合度にも性差が存在することが示された。これは後でも述べるが、各質問事項が恋愛段階の高まりに伴って、その内容や価値が個人内で変化していることを示すと考えられる。例えば、肉体的関係を境に、その前後で関係の「報酬」や「コスト」といったものの内容自体が変化したり、同一の事柄であっても個々人内での意味づけが異なったものとなる、と考えることができる。

さて女性においては、関係の初期段階においてのみ代替関係の質要因が有意に寄与し、それ以降では全く寄与していなかった。これは松井 (1990) の「女性はキスをする段階になってはじめてコミットメントを高める」という知見をあわせて考えると理解し易い。恋愛行動段階3に属する行動の「キスをする」までは、周囲の代替関係に広く目を配り、慎重に相手を選択していこうとする女性の姿を見て取ることができる。また女性における段階1-3から4での投資量の価値の変化もこの点と符合する。慎重に相手を選択していく時期の共通の友人の増加や思い出の共有は、終結コストを増加させることになり、関与度に対して負に作用する。しかし段階4にいたり、選んだ相手だけにその関心は寄せられるようになると、投資量はポジティブ価を持ち、代替関係要因は相対的にその影響力を弱めてしまうと考えられる。

投資モデルでは、モデル上、投資量は関係継続に伴い1次関数的に増加する性質をもつとされ、関与度に対してマイナスには負荷しない。そして概念的には内発的投資と外来的投資とに分けて考えられている。内発的投資とは、時間や情緒的な努力、自己開示などのことであり、外来的投資とは共通の友人や所有物の共有、その関係独特に結びついた行動・人・事物などである。

内発的な投資は、各個人が自ら進んで行う性質のものであり、各人の意志的な行動である。それ故に、関係を終結させることでそれらを失うことは心理的に非常に苦痛なこととなり、関係終結ともなうその価値の減少は劇的なものとなる。まさに「投資」が無駄になってしまう。終結コス

トは内発的投資に結びつき増加していくと思われる。

これに対して外来的投資は、当人が好むと好まざるとを問わず関係に結びつく種類のものである。関係を終結させることでそれらは失われてしまうが、青年の恋愛関係においてその価値の減少は内発的投資ほど劇的ではないであろう。つまりすでに婚約した関係や結婚関係とは異なり、その継続／崩壊の決定が比較的自由である青年の恋愛関係にとって、さほど大きな意味をもたず、逆に関係の満足度の低下にともない、「坊主憎けりゃ…」的に関係の関与度に対してマイナスに負荷することも考えられる。例えば、いつでも相手のかたをもつ共通の友人を快く思わなくなり、相手と定期的に行っていたショッピングが楽しくなくなったりすることはよくあるであろう。したがって投資量は、関係の継続と共に1次関数的に増加していくが、関与度に対して常にプラスに負荷するとは考えにくくなってくる。投資量についてそれが内発的なものか、外来的なものかを分けて考える必要があるのではないか。この点からも投資モデルの妥当性について考察を加える必要がある。

○投資モデルの妥当性について 今回の調査では、関係のコミットメントに対する投資モデルの優位性を示した中村の研究(1990;1991)をふまえ、いくつかの方法論的問題を改善し、その妥当性を吟味した。親密な異性関係の継続／崩壊過程には、いうまでもなく様々な要因が関与している。それはまさに人それぞれで、単独で作用する要因もあるであろうし、複雑に交差し機能しているものもあるであろう。そのような現象把握上非常に不鮮明な対象に対し、比較的少数の説得的な概念を用いて、包括的に記述・説明を試みた点に投資モデルの利点がある。しかし今回の調査結果を解釈していく上で明らかになった投資モデルの問題点は、各概念設定があまりに包括的であるが故に、その操作的定義の困難さを否認しないことである。例えば先にも挙げた、「投資量」要因における「内発的」、「外来的」の別の問題はこの点を反映している。Rusbult(1980;1983)の設定したモデルでは「内発的」投資と「外来的」投資は、概念上明確に区分されているが、測定していく上ではその区分はみられない。つまりこれは「投資」という枠組みでくくられた個々の事例を、「内発的」か「外来的」かで明確に2分できないことを表しているのではないかと推測できる。

また関係の「報酬」及び「コスト」の定義の問題も同様に考えることができる。先の研究(e.g. Rusbult, 1980;1983;中村, 1990)では「報酬」と「コスト」を区別して考えているが、報酬価の低いものがコスト的に働いたり、その逆も当然あり得るであろう。今回の調査では、Rusbult(1983)の示した「報酬」及び「コスト」の具体的内容が、わが国の青年の親密な異性関係の実態に合致していなかった可能性は示唆されたが、同時にその同定の困難さも提示された。関係の「報酬」及び「コスト」の具体的内容は、カップル単位での相互規定的側面を多分にもつものであろうし、また関係が進展していき、親密度が増していく過程において、随時、質的な変化を呈するものであろう。またカップルをもっと大きなユニットの中の一つと考えたときに、社会的要因、状況要因により関係の「報酬」及び「コスト」は大きく影響を受けるものであろう。このように考えたとき、投資モデルの示すところに従い、個々人のもつ認知的、心理的レベルの「報酬」や「コスト」を最大公約数的に記述していくことが果たして有価値であるか疑問になってくる。仮にその記述を試みたとしてもそれは多大な手間と時間を要する仕事であろう。これらの点を考慮した上でさらに「報酬」や「コスト」といった枠組みで、個々人の認知を扱っていく有用性は今のところ示されていない。つまり認知レベルでのその特性の抽出には、そういった枠組みで記述する限り、やはり限界があるのではないかと。

今回の調査により、関係への関与度を規定する要因には明確な性差がみられ、投資モデルは男女別に修正される可能性が示唆されたが、予測・説明モデルを構築していく上で、性差を呈示してい

くことの是非には明確な判断を下すことができない。この意味で事態のより正確な記述・説明と予測のためには、より適切な説明概念の設定が望まれる。

参 考 文 献

- Berg, J. H., & McQuinn, R. D. 1986 Attraction and Exchange in Continuing and Noncontinuing Dating Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 942-952.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The Relationship Closeness Inventory: Assessing the Closeness of Interpersonal Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 729-807.
- Byrne, D., & Nelson, D. 1965 Attraction as a Linear Function of Proportion of Positive Reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- Chatterjee, S., & Price, B. 佐和隆光・加納 悟 (訳) 1981 回帰分析の実際 新曜社 (Chatterjee, S., & Price, B. 1977 Regression Analysis by Example, John Wiley & Sons.)
- Clark, M. S., & Mills, J. 1979 Interpersonal Attraction in Exchange and Communal Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現 —コミュニケーションに見る発展と崩壊— 心理学評論, 33, 322-352.
- 井上和子 1985 恋愛関係における Equity 理論の研究 実験社会心理学研究, 24, 127-134.
- 古畑和孝 1990 “愛”の特集号の編集にあたって—愛の心理学への序説— 心理学評論, 33, 257-272.
- Kelley, H. H. 黒川正流・藤原武弘 (訳) 1989 親密な二人についての社会心理学 ナカニシヤ書房 (Kelley, H. H. 1979 Personal Relationships Their structures and processes. Lawrence Erlbaum Associates)
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ—R C Iの妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井 豊 1993 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松井 豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社
- Michaels, J. W., Edwards, J. n., & Acock, A. C. 1984 Satisfaction in Intimate Relationships as a Function of Inequality, Inequity, and Outcomes. *Social Psychology Quarterly*, 47, 347-357.
- 長田雅喜 1990 対人魅力の研究と愛の問題 心理学評論, 33, 273-287.
- 中村雅彦 1990 大学生の友人関係の発展過程に関する研究—関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討— 社会心理学研究, 5, 29-41.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, 31, 132-146.
- 奥田秀宇 1993 態度の重要性和仮想類似性—対人魅力の及ぼす効果— 実験社会心理学研究, 33, 11-20.
- 奥田秀宇 1994 恋愛関係における社会的交換過程—衡平, 投資, 互惠モデルの検討— 実験社会心理学研究, 34, 82-91.
- Rusbult, C. E. 1980 Commitment and Satisfaction in Romantic Associations: A Test of the Investment

- Model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult, C. E. 1983 A Longitudinal Test of the Investment Model: The Development (and Deterioration) of Satisfaction and Commitment in Heterosexual Involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.
- Rusbult, C. E., Johnson, D. J., & Morrow, G. D. 1986 Predicting Satisfaction and Commitment in Adult Romantic Involvements: An Assessment of the Generalizability of the Investment Model. *Social Psychology Quarterly*, **49**, 81-89.
- Rusbult, C. E., & Buunk, B. P. 1993 Commitment Processes in Close Relationships: An Interdependence Analysis. *Journal of Social Personal Relationships*, **10**, 175-204.
- Sedikides, C., Oliver, M. B., & Campbell, W. K. 1994 Perceived benefits and costs of romantic relationships for women and men: Implication for exchange theory. *Personal Relationships*, **1**, 5-21.
- Sprecher, S. 1988 Investment Model, Equity, and Social Support Determinants of Relationships Commitment. *Social Psychology Quarterly*, **51**, 318-328.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D. & Rottmann, L. 1966 Importance of Physical Attractiveness in Dating Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 508-516.
- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1973 New Directions in Equity Research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 151-176.
- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1976 New Directions in Equity Research. *Advances in Experimental Social Psychology*, **9**, 1-42.

〔付録〕投資モデル要因測定項目

＜報酬項目＞

身体的魅力を感じる
 相手は自分にない所を補完
 生活態度・習慣・環境の類似
 人格・人柄に満足
 相手は知的である
 ユーモアのセンス
 自分に合わせてくれる
 物質的・精神的に得る物が多い
 得ているものは理想通り

＜投資量項目＞

他の人の事など考えられない
 一緒に思い出が多い
 実際多くのお金を使ってきている
 共同で使っているものが多い
 相手とだけしかしない事が多い
 相手の心の支え、喜びの共有
 自己開示の程度
 知人・出来事・活動・得た事の多さ
 交際に尽くしている程度
 尽くした程度を考えた上での継続価値

＜満足度項目＞

交際に魅力を感じる程度
 交際相手に感じる好意度
 交際の現在の満足度
 自分の理想との比較

＜コスト項目＞

交際継続のための犠牲が多い
 お金がかかる
 時間があわない
 自分を困らせる事をする
 人格・人柄に魅力を感じない
 生活態度・習慣が好きではない
 約束を守らない
 意見が合わない事が多い
 自分に不誠実
 我慢しなければならない事が多い
 普通と比較して我慢が多い

＜代替関係の質項目＞

多くの人と交際したい
 交際相手以外の異性との個人的
 つきあいは避けるべき
 代替者との交際の満足度
 代替者との交際と理想との近さ
 代替関係と今の関係の比較

＜関係関与度項目＞

交際継続の希望
 交際継続の予測
 相手にのめり込んでいる程度
 代替関係に必要な魅力度
 交際を大切に思っている程度
 近い将来交際終了の可能性